

『三四郎』美禰子が落とした白い花

Junko Higasa 2014.5.6

運命の出会いをもたらした池の前で、美禰子は『左の手に白い小さな花を持って、それを嗅ぎながら来る』そしてその花を三四郎の前に落として行った。『三四郎は女の落として行った花を拾った。そうして嗅いでみた。けれども別段の香においもなかった。三四郎はこの花を池の中へ投げ込んだ。花は浮いている』

このシーンは聖母マリアが幼児イエスにやがて来る受難を示す小さな白い花を差し出すシーンである。

三四郎はその受難を拾う。けれどもまだその香りを感じることはできない。即ち予感すらない。そして運命の池にそれを投げ込んだ。花は運命の上に静かに漂っている。受難への道の始まりである。

『虞美人草』に《運命は丸い池を作る。丸い池に思わぬ人をはたと行き合わせる》という表現がある。『草枕』には鏡の池が、『三四郎』には小泉八雲先生がぐるぐる回った池が記される。池は終点のない人と世の関わりであり、追い求める人生の象徴であり、己の外内と内面を映す鏡である。

恋愛において幼児おきなごであった三四郎は「高みにある恋」がもたらす苦しみという受難の中で、池に映る己の姿を眺めながら、現実の真面目を貫き通した。

そして迷ストレイシーブ羊。結果的に三四郎は「小さなものの一人が亡びることを望まない」天の意思に従って、美禰子を「命のつながる結婚」に導いたともいえる。